

---

# 東北芸術工科大学 紀要

## BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第29号 2022年3月

ワラゲツの「民芸品」化の過程に関する一考察

— 旧山形県西置賜郡東根村浅立のワラゲツを事例として —

A Study on the Process of Straw boots becoming a "Folk Craft"

— Taking the case of Straw boots in Asadachi area, Higashine Village, Nishiokitama District,  
Yamagata Prefecture —

守谷 英一 | MORIYA Eiichi

# ワラグツの「民芸品」化の過程に関する一考察

— 旧山形県西置賜郡東根村浅立のワラグツを事例として —

## A Study on the Process of Straw boots becoming a "Folk Craft"

— Taking the case of Straw boots in Asadachi area, Higashine Village, Nishiokitama District, Yamagata Prefecture —

守谷 英一 | MORIYA Eiichi

The Shirataka Town History and Folklore Museum has a collection of several straw boots. It seems that those straws are made by the people of Shirataka Town. Especially in Asadachi, Shirataka Town, people made a lot of straw boots.

People in the Asadachi area made straw boots during the winter when farming was not possible. People in snowy countries wore straw boots on a daily basis during the winter. People in the Asadachi area continued to make straw boots until many in the snowy country began to wear rubber boots instead of straw boots. People carried straw boots to urban areas in Okitama-gun, such as Yonezawa, and sold them, earning a lot of living expenses.

In the 1910s, Asadachi people exhibited straw boots at local fairs and national product exhibitions. So straw boots became popular with people as an appreciation item. When "Mingei undo", which makes folk crafts popular in Japan, became popular, straw boots made with Asadachi received high praise as "folk crafts". Yanagi Muneyoshi covered Asadachi's straw boots in a book called "Toshigoto no Nippon". This ensured that Asadachi's straw boots were recognized as "folk crafts".

What I consider in this treatise is the process by which straw boots change from daily necessities to folk crafts and the factors that work there.

Keywords:

生業、民芸、民具、工芸、柳宗悦

Subsistence, folk crafts, Mingu, crafts, Muneyoshi Yanagi

## 1. 問題の所在

### (1) 浅立のワラグツ

#### 1) 歴史民俗資料館所蔵のワラグツ

かつて、雪国ではゴムの長靴が広く普及するまで、ワラで作られた長靴、「ワラグツ」が冬季間の履物として用いられていた。これらは「藁沓(わらぐつ)」、「深沓(ふかぐつ)」などさまざまな呼び方をされているが、本稿では引用以外、便宜的に「ワラグツ」と表記することとする。

白鷹町歴史民俗資料館には、写真1のような「ワラグツ」がいくつか収蔵されている。



写真1:白鷹町歴史民俗資料館に展示されているワラグツ

このワラグツは、民具などの収蔵展示館整備を目的として昭和55年(1980)頃から収集され、その後廃校となった小学校などに収蔵されていたものである。また、所蔵品台帳が整備されていて、ワラグツの中で3点については、収集時期は不明であるが白鷹町大字杉沢地区の人の寄贈品

であることが確認できた。

また、他のワラグツも外形は同じように見える。そこで、ワラグツを使用した経験のある人たちに実物をみてもらったところ、自分たちが履いていたものと同じものであるとの証言も得た。さらに、ワラグツ製作に使われていたと考えられる木型も残されていて、それには所有者の居住地として白鷹町広野、白鷹町浅立という地名が記されている。そこで、白鷹町歴史民俗資料館に所蔵されているワラグツは、すべて白鷹町で作られたワラグツとしてよいと考える。

## 2)浅立のワラグツ

ワラグツの産地として、白鷹町で最も名が知られているのは、浅立地区である。『白鷹町史』下巻には「深くつといえは浅立、浅立といえは深くつという程名が売れ、いつしか深くつを「アサダチ」と呼ぶまでに至った」(白鷹町史編纂委員会他編 1977, p.1201)と記されている。

また、民芸運動の創始者柳宗悦が昭和23年(1948)に刊行した『手仕事の日本』には「藁沓の中で最も出来の美しいのは西置賜郡東根村浅立の産で、仕事が極めて入念であります。見る人は誰も感心するでありますよ」(柳 1985:73)と記されている。

以上のように、白鷹町地域のワラグツの中でも浅立地区のワラグツは、日用品としてだけでなく、民芸品としてもとりわけ評価の高いものであった。

### (2)問題の所在

#### 1)先行する調査や研究の課題

浅立地域のワラグツについて記されたものはそれほど多くはない。地域の産業あるいは名産品として紹介されているものとして、東根村郷土史刊行会の『東根村郷土史』がある(東根村郷土史刊行会 1972, pp.320-322)。これは浅立地区出身の小形仁兵衛の調査報告をもとにしている<sup>1</sup>。

『白鷹町史』下巻には産業として浅立のワラグツが取り上げられている。執筆にあたったのは奥村幸雄で、『東根村郷土史』の記述内容を踏まえた上で、さらに自己の調査したことや関連する統計資料に関することも付け加えて記している(白鷹町史編纂委員会他編 1977, pp.1201-1202)。

手仕事の聞き書きとして奥村幸雄の『手わざの葉 ―手仕事をたずねて―』の「浅立ふかぐつ」がある。これは浅立地区の沼沢甚市から昭和49年(1974)に聞き書きした<sup>2</sup>ことを中心として、ワラグツの材料や作り方、販売方法なども

記述されている(奥村 1977, pp.85-89)。

以上はそれぞれ短いもので、浅立のワラグツの全体像を俯瞰するものとしては不足を感じる。

また、民芸品としての浅立のワラグツの評価が確定したのは、先に述べた柳宗悦の『手仕事の日本』の記述からであると考えられる。しかし、この地域の記述物で、そのことに言及しているものはない。また『手仕事の日本』にも、柳と浅立のワラグツとの出会いについては何も記されていない。そのため、浅立のワラグツを柳がどのような経緯で知り、評価するに至ったかを調べる必要があると考える。柳の動向や民芸の歴史の記述の中から浅立のワラグツとの接点を明らかにする必要がある。

さらに、浅立のワラグツが、一般のワラグツの中でどのような位置を占めるのかは不明である。他のワラグツとを比較し、ちがいを明らかにしたものも見当たらない。浅立のワラグツの特長を確認するために、各地のワラグツと比較、検討する必要がある。そのためには各地の資料館や博物館に収蔵されているワラグツを調査する必要があると考えるが、令和元年(2019)12月から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため、県境を越えた移動の自粛要請が続き、実際の調査は不可能であった。そこで、近隣の資料館、博物館以外は手元にある図録などに頼ることとした。

以上を踏まえ、明らかにすべきこととして次項のことを本稿の課題として設定した。

#### 2)課題の設定と本稿の目的

最初に、各地のワラグツと比較することにより、浅立のワラグツの形態的特色を明らかにしてゆきたい。さらにその特色を製作工程と関連付ける事によって、ワラグツの製作技術において、浅立のワラグツ製作過程ではどのようなことが重視されてきたのか、それが製品としてのワラグツにどのような形として表れているのかなどの技術の特色も明確になるであろう。

ついで、浅立のワラグツの産業史をまとめることを課題とする。浅立のワラグツは日用品として作られていたものが、次第に商品として販売することが目的として作られるようになる。そして、やがては実用品としてだけでなく、鑑賞を目的とする民芸品としても販売されるようになっていった。そのような歴史を丁寧にたどり、それぞれの節目に活躍した人々や働いた要因などを明らかにすることが必要であると考えられる。

最後に、柳宗悦と浅立のワラグツとの出会いについて解

明する。後述するが、筆者は「民芸品」化は柳宗悦の個人的な「評価作業」と切り離す事はできないと考える。したがって、柳が浅立のワラグツを見出す経過を明らかにすることは浅立のワラグツが「民芸品」になる経過の解明を行うことと同義であると考ええる。

以上の課題の解決を行った上で、「日用品」が「民芸品」となる過程に働く要因を考察し、一般化することが本稿の目的となる。

## 2.課題の解決

### (1)浅立のワラグツの特色

#### 1)他産地のワラグツとの比較

まず、浅立のワラグツの特色を知るため、いくつかの図録記載のワラグツの写真で形を比較検討する。調査した文献は下記のリストのとおりである。なお、白鷹町歴史民俗資料館所蔵品のワラグツについては、本稿においては特に区別して論ずる必要がある場合を除き、今後は「浅立のワラグツ」として扱って論を進めてゆくこととする。

- 1 祝宮静編1965『日本の生活文化財』第一法規出版
- 2 長岡市科学博物館編1970『雪国の民具―旧積雪科学館収蔵民具目録―』積雪研究会
- 3 朝日新聞福島支局編1980『ふくしまふるさとの手仕事』歴史春秋社
- 4 農林水産技術会事務局編1988『写真で見る農具民具』農林統計協会
- 5 只見町史編さん委員会編1992『図説会津只見の民具』福島県只見町
- 6 上越市史専門委員会民俗部会編1999『桑取谷民俗誌』新潟県上越市
- 7 三条市市民部生涯学習課編2017『吉ヶ平の民具―収集・調査・整理の記録―』三条市

以上の文献から10点のワラグツ写真資料が得られた。それらは靴の甲の部分の編み方によって、概ね次の3種類に分類できると考える。

まず、ワラがつま先からかかとにかけ横に流れるように編まれているものである。これを「A」とした。次にワラが底から甲頂に向かって立ち上がる形で編まれているものである。これを「B」とした。最後に甲の部分が網のように編まれているものである。これを「C」とした。

この分類結果を表1として示した。なお、文献番号は先に示した調査文献のリスト番号と同様である。

文献番号	資料番号	産地等	形
1	1	旧文部省資料館蔵1	A
	2	旧文部省資料館蔵2	B
2	3	新潟県越路町塚野山 (現在は長岡市塚野山)	C
	4	新潟県直江津市(現在は上越市)	B
	5	岐阜県高山市	C
3	6	福島県金山町	B
4	7	新潟県小国町(現在は長岡市小国町)	C
5	8	福島県只見町	B
6	9	新潟県上越市桑取谷	C
7	10	新潟県三条市吉ヶ平	C

表1:ワラグツ資料の形態分類表

資料番号1と2については、収集地が示されていないので所蔵館名で示してある。

次にそれぞれの形態の例として、調査した資料写真から特徴がわかりやすいと思われるものをピックアップし、写真2から4まで3点の資料を示す。

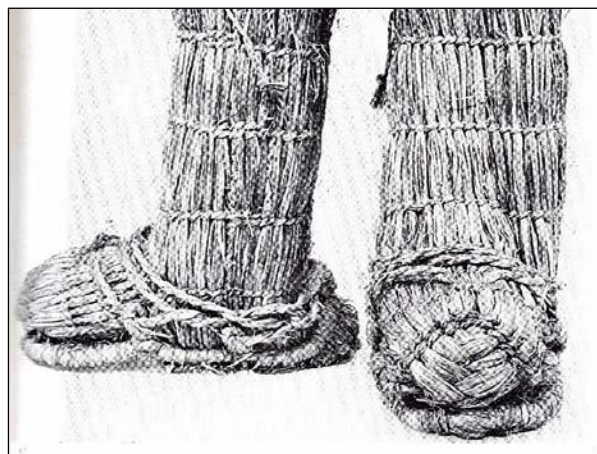


写真2:形態「A」(資料1 旧文部省資料館蔵1)

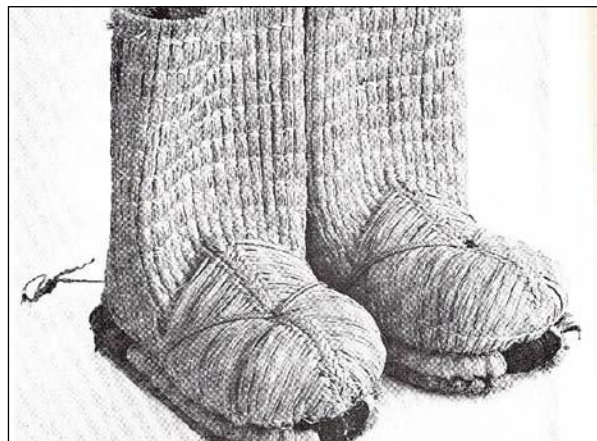


写真3:形態「B」(資料2 旧文部省資料館蔵2)



写真4:形態「C」(資料3 新潟県越路町塚野山)

写真1として示した白鷹町歴史民俗資料館のワラゲツのうち、右側のワラゲツの甲の部分の編み方がわかるように拡大したものを写真5として示す。このワラゲツの甲の部分は、靴の甲の部分のワラが底から甲頂に向けて立ち上げて編まれている。形態「A」から「C」の3分類の内では、「B」の1種であると分類してよいと考える。



写真5:白鷹町歴史民俗資料館のワラゲツの甲の部分

また、近隣の中山町歴史民俗資料館(山形県西村山郡中山町)及び西根郷土資料館(山形県長井市西根)の所蔵するワラゲツを調査したが、白鷹町のものと同様の類似したもので、「B」に分類できるものであった。さらに秋田県に近い遊佐町歴史民俗資料館(山形県飽海郡遊佐町)のワラゲツも調査したが、甲が網状に編まれたもので、「C」に分類できると思われる。

以上のことから浅立のワラゲツは、各地のワラゲツに類似形態のものがあり、形態的には独創的なものであるとはいえ

ないことがわかった。

## 2)浅立のワラゲツの特色

大まかな形態比較では、浅立のワラゲツの特色を明確に提示することは難しいことがわかった。そこで浅立のワラゲツの特色を明確にするために、形態「B」と分類した資料2、4、6、8と浅立のワラゲツを、特にワラゲツの甲の部分の編み方に注目して比較する。なお、資料2はすでに写真3で示しているので、残りの3点を写真6から8として示す。



写真6:形態「B」(資料4 新潟県直江津市)



写真7:形態「B」(資料6 新潟県直江津市)



写真8:形態「B」(資料8 福島県金山町)

これらのワラグツと比較すると、浅立のワラグツは、ワラグツの甲を構成するワラがきちんと整えられて編まれている。また、1本1本のワラの太さもそろえられている。そのため、浅立のワラグツが繊細に造られていると感じられる。そこに浅立のワラグツの特色が現れている。

総括すると浅立のワラグツの特色は靴の甲のつくりにある。他の物と比べて繊細さと丁寧さを感じさせるところにあるといえよう。

## (2) 浅立のワラグツの歴史

### 1) 浅立という集落

浅立は、山形県の中西部西置賜郡白鷹町のもっとも南部にある集落である。

集落の西には最上川が流れている。また、集落の東は白鷹山から連なる丘陵の高台、鷹戸屋山(標高792.8m)が連なっていて、その山裾の集落が浅立ということになる。

現在は集落の西部の水田の中を南北に国道287号線が通っているが、以前は、もっと東寄りの山裾を国道が通っていた。そして、この街道に沿って家々が存在するが、そこが浅立の中心集落である。

浅立の東方山麓地域には7カ所の縄文集落跡遺跡があり、古くから人々が居住していたことがうかがえる。また、中世期、戦国期の館址もそれぞれ1カ所存在し、まとまった集落が形成されていたこともうかがえる(白鷹町史編さん委員会他編, 2014, pp.885-886)。しかし、近世以前の浅立村に関する文書記録はほとんど残されていないため、具体的な様相は不明である。

伝承では浅立は明徳年間(1390-1994)には存在していたといわれている。しかし、文書記録に浅立の名前が表れるのは、管見する限りでは伊達氏の文書で、天文7年(1538)9月3日の日記を天正14年(1586)9月17日に写したとされる「御段銭古帳」である。そこには、「下長井白川より南」分に「一 八くはん七十五文 あさたち」と記されているものである(小林宏, 1970, p.282)。したがって、浅立という集落は近世以前からの集落であるといえる。

近世になると、浅立の生業の様子が次第にわかってくる。慶長年間(1596年から1615年)に編集されたとしている『邑鏡』や文政10(1827)年の資料を主とし、村ごとに年次の異なっている検地結果を含めてまとめられた「村目録」などからは、水田と畑地がほぼ同じ面積で、稲作の他に紅花や青苧の栽培、養蚕などによって暮らしを支えていたことがわかる<sup>3</sup>。

近代に至り廃藩置県により置賜県(後に山形県)西置賜郡浅立村となり、明治22年(1889)の町村制施行に伴い西置賜郡東根村浅立となる。さらに昭和29年(1954)に白鷹町が成立すると、現在の白鷹町浅立となった。

現在、かつて主産業であった農業は白鷹町においても衰退している。平成27年(2015)の国勢調査では、第一次産業従事者は産業人口の10.4%まで減少している。農業の形態も変わってきている。青苧の生産はまったくなくなり、養蚕も行う農家もなくなっている。

直接的に浅立地区の農業の実態を示す資料は管見した限りでは見当たらないが、浅立を含む東根地区は町の中では農業の盛んな地域である。平成27年(2015)の農林業センサスによると、白鷹町の農業企業体数は608であるが、浅立を含む東根地区は160となり、町全体の約26%を占めている。したがって、浅立地区は白鷹町の中ではかつての生業の姿が感じられる地域といえる。

### 2) 「えりわら」によるワラグツの製作

さて、浅立のワラグツの繊細さ、丁寧さはどのようにして生まれたのであろうか。記録は残っていないが近世以前から浅立ではワラグツが作られていたであろう。それはどのような物であったかは現在ではわからないが、現在見られる繊細で丁寧なものとまったく同じ物ではなかったと推測される。『東根村郷土史』及び『白鷹町史』下巻では、それまでのワラグツに改良を加えられ現在見られる様なワラグツになったと記されている。そのことについて述べておきたい。

『東根村郷土史』の「第5章 産業の推移と土地改良」

の「第二 名産」には「浅立深ぐつ」という項があって、「昔は自分の家で履くものは、自分の家で作る程度のもので、何れも大同小異、素朴なものであった」と記した上で、「それが、明治初年浅立村原部落の鈴木大吉がえりわらによる深ぐつを作った。えりわらとは沢山のわらの中から光沢のあるわらを選び、節(ふし)を揃え表に節が出ぬように工夫したものである。この方法により単なる実用的履物が美術的作品となった。これは深ぐつ作りにおける一つの革命である」と記されている(東根村郷土史刊行会編 1972, p.230)。

この「えりわらによる深ぐつ」のさらに詳しい説明は、『白鷹町史』下巻や奥村幸雄の『手わざの栞』に記してある。それを参考に「えりわらによる深ぐつ」製作の要点をまとめてみる<sup>4</sup>。

#### 1 原料の稲の品種の選別

・ワラグツの原料とする稲の品種は「月布(げっふ)」や「赤穂(あかほ)である。

※これらの品種は1反あたり1俵ぐらいの減収になる。

#### 2 刈り取ったワラの乾燥

・刈り取ったワラは畦に立てて乾燥する(これを「カノコタテ」という)。

・カノコタテの期間は1日か2日、その後は普通の稲と同様にハセ掛けして乾燥する。

※こういう乾燥方法だとワラが青く仕上がる。すぐにハセ掛けすると、中が赤くなって使えない。

#### 3 ワラの選別

・干し上がったワラから深ぐつの部分に合わせ、節の長さを揃えたワラを選別する(この作業過程を「モトゴシラエ」という)。

※この作業は女性の仕事であった。

#### 4 編み

・編む部分にあったワラを使い、節を表に出ないようにして編む。

このような工程から見ると、「えりわら」とは「選りワラ」であって、「ワラを選別すること」であると推定できる。

そのワラの選別は原料とする稲の品種の選別から編みの時のワラの選別まで、何度も行われている。とりわけ、乾燥の過程で、他の稲とは違う乾燥方法がとられていることまで選別は徹底していた。それが「えりわらによる深ぐつ」の造り方であった。

#### 3)ワラグツの商品化

『東根村郷土史』の筆者は、この「えりわらによる深ぐつ」

によって「商品価値が向上し、町の人々から歓迎されて需要が増加、価格も上がり、良い収入になるから生産高も増加した」と記している(東根村郷土史刊行会編 1972, p.320)。

生産高の増加は質的な向上だけが要因ではなく、ワラグツの流通路の確立も大きな要因であった。ワラグツは積雪期の履物であるから、都市部でも雪の多いところがよい消費地となる。浅立の近隣では荒砥、長井がそうであり、少し離れたところでは、置賜では小松や米沢などが大きな消費地になるところであった。

近隣の荒砥や長井などは古くからワラグツのよい市場だったであろう。しかし、現在のように交通運輸手段が発達していない当時は、遠方に当たる小松や米沢まで雪道を運ぶのは容易ではなかったと考えられる。明治25年(1892)ごろ、浅立の原地区の梅津清助がソリにワラグツを積み、30kmほど離れた米沢市に運んで売り出した。それが米沢に向けて大量に売り出したはじめだという。以降、太田良助、鈴木甚太郎などがワラグツの販売では活躍したとも伝えられている(東根村郷土史刊行会編 1972, p.321)。

ワラグツ生産高の増加は日露戦争の際のワラグツ供出割り当て量からも窺い知ることができる。

『白鷹町史』下巻によると日清、日露戦争に際しては、軍靴の上に履くワラグツの供出が割り当てられたが、明治27年(1894)の日清戦争では戸数や地租を加味して割り当てられ、西置賜郡全体では3,500足が割り当てられた。浅立地区を含む東根村は226足の割当てで、西置賜郡全体の約6%であった(白鷹町史編纂委員会他編 1977, p.1036)。

明治37年(1904)の日露戦争では、西置賜郡全体に4,489足割り当てられているが、東根村の割当数はそのうち1,750足で、全体の約39%にもなっている(白鷹町史編纂委員会他編 1977, p.1041)。

この違いについて、『白鷹町史』の執筆者は「深ぐつ作りが、当時如何に盛んであったかが推察できる」と記している(白鷹町史編纂委員会他編 1977, p.1201)。

このような過程を経て先述したような「深ぐつといえば浅立、浅立といえば深ぐつという程名が売れ、いつしか深ぐつを「アサダチ」と呼ぶまでに至った」ということになったのであろう。浅立のワラグツは大正初期(1912)ごろで1足13銭、当時の男の年季奉公が20円であった(白鷹町史編纂委員会他編 1977, p.1202)ので、ワラグツ150足程にあ

たる。一人前の男は昼間に2足、夜仕事で1足作るのが通常であったから、30日間の仕事で1年の年季奉公分を稼いでしまう。冬期間の仕事としては極めて有利な仕事であったといえよう。

大正末期から昭和初期にかけては、浅立地区180戸中150戸ほどワラグツ作りをしたという(白鷹町史編纂委員会他編 1977,p.1202)。

#### 4)民芸品として見出される

浅立のワラグツはその外観の美についても高い評価を受けるようになる。『東根村郷土史』では地元農産物品評会で優秀賞を取る様になったことに続き、大正年間の大阪博覧会で梅津儀蔵が出品したワラグツが、ある資産家を買われて床の間に飾られ、銭入れに使われていたということが地元の人に語り継がれていることを記している(東根村郷土史刊行会編 1972, p.321)。

大正年間に、大阪では第5回、第6回の産業博覧会をはじめとして、いくつかの博覧会が開催されている。『東根村郷土史』に記されている「大阪博覧会」がどの博覧会を指しているのか確定できないが、ワラグツが美的鑑賞の対象となることは地元の生産者にとっては極めて意外な現象であったことを物語る挿話と考える。

民芸運動と浅立のワラグツの出会いの時期について『東根郷土史』では昭和15年(1940)に置賜農学校(現在の県立置賜農業高校)で民芸品展覧会が開催されたときが最初と思われることを記している。この展覧会に小形安雄がワラグツを出品したが、それを見た東京の審査員が「これは面白い」と、200足を注文した。小形は早速注文に応じて東京へ送ったというのである(東根村郷土史刊行会編 1972, p.321)。

この置賜農学校で開催された民芸品展覧会とは、農林省(当時)が昭和8年(1933)に山形県最上郡新庄町(現在は新庄市)に設置した積雪地方農村経済調査所(以下「雪調(せつちょう)」と略称)内に創設した雪国協会が、東北各県の経済部などと共同して開催したものである。山形県では昭和15年2月から3月にわたって、庄内、村山、置賜の3農学校で民芸品展が開催されている(森本 1940, p.61)

この時の資料の一部が、雪調の跡地に当時の建物の一部を保存・復元して設置された「雪の里情報館」に残されている。その中に小形の出品したワラグツの写真があり、小形のワラグツはこの置賜農学校での民芸品展に出品され

たことが裏付けられる。



写真9:出品された小形安雄のワラグツ写真(提供 雪の里情報館)

また、東北で開かれた展覧会の報告は森本信也によって『月刊民藝』昭和15年8月号(第2巻第8号)で報告されている(森本 1940, pp.6-18)。

この報告は出品作品のそれぞれについて名称、使用用途を含め、作品の評価などが記されたものである。「藁深靴」の項目には写真の他に次のような記述がある。



写真10:『月刊民藝』昭和15年8月号p9のワラグツ写真

藁(さき)に藁細工は山形県が第一であると云ったが、技術に於てその體裁に於てやはり山形に他は及ばないであろう。特に之が商品的生産としては山形県庄内の山添村と置賜の東根村に指を屈せざるを得ない。(中略)置賜東根村の型は、前者(山添村のもの 筆者註)に較べて少々技が繊細であり、體裁は優れてゐるが耐久力に於て稍損色があるかの如く見受けられる。藁材料の品質を特に吟味するために青く



光澤があり、見るからに農民藝術的な藁靴である。編み方は庄内と違い正面に二條の太い編み線を表はし、瀟洒な感じをあたへるが、甲の側面を下から編んだ方がより実用性を與へ得ると謂へよう。三越の展覧會でもこの地のもので赤い布で縁を取った子供用の藁靴が素晴らしい人気を呼んだ。子供用のものは深さ三寸位で地元の値は一圓見當である。(森本 1940, p.9)

森本の詳細な報告によっても東根村、つまり浅立地区の藁靴が出品されていたことがわかる。出品者までは特定できないが文献史料によっても『東根村郷土史』の記述が裏付けられたといえよう。

さらに、詳細は後述するが、この東北の民芸品展には柳宗悦が創設した日本民芸協会、日本民芸館も協力し、柳も視察している(柳、柳田 1940, p.29)ので小形が出品したワラグツも柳宗悦は見ていると推測される。

#### 5)浅立ワラグツの広がり、しかしやがて生産の終焉へ

浅立のワラグツの知名度が上がると、この地方だけでなく山形や新庄などにまでワラグツは売り出された。それだけでなく、海外にまでワラグツ製作技術は伝えられた。

昭和17年(1942)には浅立の鈴木甚太郎が、当時植民地であった朝鮮忠清南道府の招きで、太田(現在の大韓民国忠清南道太田広域市)に行きワラグツ製作の指導を行っている(東根村郷土史刊行会編 1972, pp.320-321)。

これは、昭和16年(1941)の日米が開戦により、履物の原料の皮革や輸入に頼っていたゴムが不足して靴の代用品としてワラグツが目されたためである。国内でも、地元旧制中学校のスキー訓練の代用靴などの試作なども行っている(東根村郷土史刊行会編 1972, p.321)。

しかしながら戦後になり、皮革やゴムの不足が解消されると、ワラグツは次第に日用品としての地位を失ってゆく。耐湿、耐水性や強さなど皮やゴムの靴とは比較にならなかったからである。民芸品として「浅立深ぐつも「深ぐつ」の名で土産物売場にならぶようになった」と『東根村郷土史』は結んでいる(東根村郷土史刊行会編 1972, p.321)

現在の浅立地区には趣味のようにしてミニチュアのワラグツを作る人以外にワラグツを作る人はいなくなっている。かつてワラグツをはいた記憶がある人は60代になっている。おそらく昭和40年代にはワラグツはほとんど作られなくなっていたのではないかと考えられる。

### (3)民芸品としての浅立のワラグツ

#### 1)「民芸品」とは

一般的にいわれている「民芸」とは「民衆的工芸」の意味で、柳宗悦たちが便宜的に創作したものであると柳自身が記している(柳 2006, p.105)。しかし、「民芸」を定義することはかなり困難なことである。

柳自身もくり返し民芸の定義を述べている。たとえば、昭和16年(1941)に出版した『民藝とは何か』では、次のように民芸を「定義」している。

民藝とは民衆が日々用いる工芸品との儀です。それ故、実用的工芸品の中で、もっとも深く人間の生活に交わる品物の領域です。俗語でかかるものを「下手(げて)」な品と呼ぶことがあります。ここに「下」とは「並」の意。「手」は「質(たち)」とか「類」とかの謂(いい)。それ故民藝とは民器であって、普通の品物、すなわち日常の生活と切り離せないものを指すのです。(柳 2006, p.21)

また、昭和33年(1958)に出版した『民藝四十年』では、「民藝の趣旨」章の第一項「民藝の語義」において、民芸は民衆工芸であることを述べた後で「それらのものの中から、ある素質を有ったものを民藝品と呼びたいのです」と述べている(柳 1984, p.160)。また、その「ある素質」については、次のようなものであると説明している。

それ故民藝とは、生活に忠実な工芸品を指すわけです。吾々の日常の最もいい伴侶たらんとするものです。使いよく便宜なもの、使ってみて頼りになる忠実なもの、共に暮らしてみても落ち着くもの、使えば使うほど親しさの出るもの、それが民藝品の有つ徳性です。(柳 1984, p.161)。

この記述によると、「ある素質」は「使いよく便宜なもの」、「使ってみて頼りになる忠実なもの」、「共に暮らしてみても落ち着くもの」、「使えば使うほど親しさの出るもの」ということになろう。それに対して柳は質素や安価なものでも粗悪なもの、弱いものは「不正直なもの」、「変態的なもの」、「贅沢なもの」は民芸品としてもっとも避けるべきものとした。「一言でいえば誠実な民衆的工芸、これがその面目です」としている。そこに「用途への誠から湧いてくる」美、つまり「健康の美、無事の美」と呼ぶべき美があると記している(柳 1984, p.161)まとめると、「民芸品」とは、民衆的工芸品のなかで、「美」があるもの、といえよう。

柳はこの民芸品の「美」について多くの著述を行って

る。しかし、それについての明確な定義は管見の限りでは見出すことができない。松井健は次のように述べている。

ごく表面的には、柳は、ついに、何が民藝のいう美であるかについて、必要十分な定義を提示することはなかった。柳は、じかに見ることを常に教えたが、じかに見るのが、美的直感に全面的に自分をゆだねることである以外、そこから立ち入った理論的な説明はしなかった。柳は、くり返し、しかし、そのものの美しさをもたらされた理由について考えをめぐらした(松井 2005, p.79)

そのために、「民芸」あるいは「民芸品」についてある種の「混乱」があることも広く指摘されている。例えば、出川直樹はこの状況について次のように記している。

もともと「民芸」の語は柳宗悦が規定したように「民衆の生活のために民衆が作った大量で安価な工芸」という概念を表していたが、後半に使われるようになった現今ではこの語が一人歩きを始めている面もあり、そこにはおのずとさまざまな概念が付与されている。

よかれあしかれ「民芸」という語が正確に柳の規定した内容を表さない、あるいは一つの概念を指さない状況が既にできている中でこの語を巡ってさまざまな混乱が起こっている。例えば「民芸は墮落した」というようなことが言われるが、柳の規定によるオリジナルな「民芸」は墮落する筈がない。「墮落」の要素を含まないものこそ「柳の民芸」である。となるとこの場合の民芸は明らかに違う「民芸」を対象としているとみた方がいい。(出川 1988, p.257)

さらに出川は、現在の「民芸」の語の概念を「柳民芸」、「民芸そのもの」、「新・柳民芸」、「まがい民芸」の四つに分類し、柳の「民芸」の「主体をなすものは古作の中に彼の審美眼が選択した、あるいは選択したであろう美的優品群である」としている(出川 1988, pp.257-261)。

類似のことは松井も述べている。まず、松井は「雑器の美」<sup>5</sup>という論文の中の民芸の器物の特長を要約し、17項目にまとめている。さらに松井はこの17項目に「工藝の美」から要約した5項目を付け加え、22項目の条件としてまとめている(松井 2005, pp.50-55)。その上で、これらの条件項目について次のように述べている。

しかし、立ち止まって、前掲の二つの論考<sup>6</sup>において柳宗悦が掲げた民藝の特長は、明らかに、柳自身が自ら蒐めたものを見て、それについて考え、さらに諸々

の文献や資料にあたって研究した結果のとりまとめであることを確認しなければならない。いわば、柳がすばらしく美しいと考えたものから、引き出された特長なのである。柳が蒐めた美しい民藝の品々には、これらの特長があるというのである。これらの特長があれば、すべてのものが必ず美しくなるというわけではないのである。(松井 2014, p.21)

以上の点から、出口も松井も「民芸」および「民芸品」とは柳宗悦という個人の審美眼に基づく選択が働いたもの、客観的、普遍的に規定できないものと考えているといえる。ここで柳の「審美眼=美意識」について追究することは本題からそれることになるので、個までにとどめておく。そしてこの両者の見解に従い、「民芸」あるいは「民芸品」とは、実用的工芸品の中で、柳宗悦が「美しいもの」として選択したものであるとしておきたい。

## 2)柳宗悦と浅立ワラグツの出会い

前項で定義したように、「民芸品」は柳宗悦によって「美しいもの」として認められることが必要である。浅立のワラグツについては先に述べたように『手仕事の日本』で言及されており、前項の定義の「民芸品」にあてはまるものである。

そこで、柳宗悦が浅立のワラグツとであった時期が問題となる。このことについては、先に昭和15年に置賜農学校で開催された民芸品展覧会で、浅立の小形安雄が出品したワラグツを柳が見ていると推測した。その根拠について詳述したい。

置賜農学校などで雪国協会が主催した民芸展には、柳に加え河井寛次郎、外村吉之介が参加し、民芸品の審査の他、講演会、座談会を行っている(水尾 2004, p.295)。柳自身の言としても『月刊民藝』の昭和15年4月号(第2巻第4号)の柳田国男との対談において、司会の式場隆三郎の「今度の東北旅行についてすこしお話ねがひたいのですが」ということばに促されて次のように語っている。

東北六縣を全部歩きました。凡そ一ヶ月ですが、今度は非常におもしろい事情にあって、山形縣の雪害調査研究所彼處が主催なんです。民藝の新作の展覧會を各縣でもって催したんです。私共はその審査員で、將來どうしたら良いものができるかといふ相談を受けたのです。山形縣だけは地元だもんですから一ヶ所ではなく三ヶ所やったんですが、非常に品物が集まりまして、吾々にも知らないものが澤山ありました

(柳、柳田 1940, p.29)。

ここでは柳が置賜農学校行ったということは言明されていない。もちろん、小形のワラグツについても何もいわれていない。しかし、前述したように置賜農学校の民芸品展覧会には東根村おそらく浅立地区の藁靴が出品されていたことは、ほぼ間違いないことであるので、柳がこの場で浅立のワラグツを見たこともかなり確実性のある推定だといえることができる。

以上を確認した上で、置賜農学校で、民芸展覧会が開催された昭和15年2月以前に、柳が浅立のワラグツと出会っている可能性を探る必要があると考えられる。そこで手元にある『月刊民藝』の昭和14年(1939)4月の創刊号から昭和15年4月号までを所有していない昭和14年11月号(第1巻第8号)を除き浅立あるいは東根村のワラグツに関する記述を探索した。結果的には目的の記述は見当たらなかった。

次に、柳を中心にして昭和6年(1931)1月に創刊された『工藝』を調査した。『工藝』は東北芸術工科大学図書館に全120冊がそろっているため、昭和15年3月発行の102号までが対象となった。結果的にはこれにも浅立あるいは東根村のワラグツに関する直接的な記述は見いだせなかった。

直接的な記述ではないが、昭和8年(1933)6月発行の第30号には10数枚の挿絵(写真)が冊子の最初において、その11番目に「雪沓」が掲載されている。また、その解説は河井寛次郎が次のように記している。

雪の爲には、色々な履物が作られて居る。或物は深い雪を。或物ははげしさを。或物は天候を説いたりする。此靴も亦其の土地の雪を語つてあまりある。

之は雪を踏むと云ふより雪と和すと云ふ形だ。此の靴で歩かれる處雪も穏かに晴れて居る心持ちさへする。

此靴を履いて「たつつけ」をはいて。布子を膨れる程着て。莫塵簔を着て。布頭巾を冠る。それでこれが真白い中にある。

蒲を網代に編み丸め藁と布切れで編んだ裏を縫い合せ。間に油紙を夾み鼻緒をすげる。

男は黒。女は赤い鼻緒。然し色合だけで區別される以外に同じ形でありながらどこかに性(ゼンダア)が出て居るのはほえまされる。これは女物である事は言ふ迄もない。子供のものに至つては可憐の極みであ

る。

小幡茂氏より頂いたもの。山形縣東置賜郡和田村窪田村方面。同縣西置賜郡長井町地方産。米沢市銅町「にしや」店で鬻がれて居たもの、由(河井 1933, pp.8-9)。



写真11:『工藝』第30号(昭和8年6月発行)挿絵11雪沓写真

白鷹町歴史民俗資料館には「わら沓」(台帳番号1A-0227)が収蔵されている。この「わら沓」は写真12であるが、『工藝』の「雪沓」によく似ているが一部違うようにも見える。



写真12:白鷹町歴史民俗資料館の「わら沓」

『工藝』30号では河井は「西置賜郡長井町地方産」と記しているが、写真11の雪沓の産地は浅立とは違う地域かもしれない。

昭和9年(1934)11月発行の『工藝』47号は日本国内の民芸品が特集されていて、さまざまな民芸品が紹介されていて、柳宗悦によって「深靴」も紹介されている。そこには、「材料に於て、編み方に於て、形に於て、美しさに於て凡てのものに優るのは庄内で出来るふかぐつである」と記されているが、「浅立のワラグツ」については一言も記されてい

ない。ただ、文末に「因に云ふ、同じ山形縣の東西置賜郡で鼻緒付きの雪沓を作る。季節になれば米澤市の荒物屋で購ふことが出来る。土地では「甚兵衛」とか、「いがら甚兵衛」とか呼ぶ。後者は蒲で作り、上等である。鼻緒は黒や白が多く、児供には赤を選ぶ。「工藝」第三十號挿繪第十一及其の解説参照」と記されているので、柳は「浅立」のものとしては「甚兵衛(じんべえ)」は見知っていた可能性がある。

ここで示したものの以外に、管見の限りでは『工藝』の昭和15年3月発行までのものには、「浅立のワラグツ」に関する記事は見当たらなかった。したがって、『工藝』の記事から、柳が昭和15年以前に浅立の「雪沓」、「わら沓」あるいは「甚兵衛(ジンベエ)」は見知っていた可能性があるものの、長靴型の「深沓」である「浅立のワラグツ」とは出会っていないのではないかと考えられる。以上のことから、柳と深沓である「浅立のワラグツ」との出会いは昭和15年の置賜農学校での民芸品展覧会としてよいと考える<sup>7</sup>。

### 3. 考察

#### (1) 名産として商品化される要因

##### 1) 製品の改良

かつてワラグツが雪国においては必需品であった。したがって、それぞれの地域で作られ、その地域で使われるものであった。一つの産地のものが、他の地域にわたって商品として流通されるには、その地域で生産される商品より優れたもの、価値のあるものとして差別化されなければならない。

浅立のワラグツの場合、明治初年浅立村原部落の鈴木大吉による「えりわらによる深ぐつ」製作が差別化の第一歩であるといえよう。この改良は原料を精選すること、作りを精密にすることという2点が大きな改良点であったと考えられる。

一般的にワラグツなどの冬の履物の場合、製品の善し悪しは、保温性、耐湿性、堅牢性などの実用的な優秀さだけでなく美しさも善し悪しを決定する要素の一つとなるだろう。鈴木大吉の改良については、実用的な改良という面もあったのであろうが、どちらかといえば美的な面での改良であったのではないか。

先に「えりわらによる深ぐつ」の要点を示したが、それを

美的な面での改良という観点で見直してみる。これに関しては、奥村幸雄の『手わざの葉』の沼沢甚市さんの聞き書きに材料やその加工について詳しく述べられている。次に聞き書きの部分を引用する。

ふかぐつ作るには、まずわらから吟味しなね。普通のものでは美しく出来上がんねがらな。いいわらは品種によるから、月布(げっぶ)とか赤穂(あかほ)使ったものだ。いまは赤穂多いようだな。うん? 米の量か? おそとれだ、反当り一俵位ちがうべな。ほんでも仕方ねごで、いいわら欲しいがらよ。収量犠牲にするわけだ。

ほだ、なかなか手数かかるな。まず刈ったら「カノコタテ」だな。カノコタテというのは、刈った稲を畔に立てるわけよ。そして、雨にあてないで一日位干すわけ。これ二日干されっといいなよ、ほんとわ(ママ)。カノコタテしたものをハセにかけて干すと、全体青く干す上っけん、カノコタテしないで、直ぐハセにかけると中の方赤くなってうまくないなよ。ああ、この藁の特徴か、ほだな、まず茎が長いから、ミゴの部分長くて、ふかぐつの顔づくるにええごでな、それに割合太くて、しかも揃うしな。ほだ、一番はしなみあつことがな、ほだがら、細工するにはこたえらんねなよ。どこの家でもふかぐつ作ったから、一反歩位は、月布とか赤穂作付けしたべな。米の収量? うん、さっき言ったように、一俵おそとれでも、浅立では七俵位はとれたな、普通の米だと八俵はとれごで。

なんぼから作ったて? ほだナ、小学校の三、四年頃から作り始めたな。どこの家でも、誰でも作ったものよ。大体昼間二足、夜わりに一足で一日三足だべな、一人前は。ほだ、値段もよかつたがらかなりの収益になったごで。暮しの足しにも随分なつたようだ。値段は仲買人が相談して定めたようだったな。売り方か? 土地の人やったごで。天秤棒担いだり、櫛につけたりして長井から米沢の方さまで行ったもんだ。小売りも卸も両方したな。うん、この仕事のいいごな、はて、何あんべな。ほだ、家内中でされることがな。わらを選り分けるのは女子の仕事よ。これがまた大変な仕事でな、一本一本選んなねがらよ、たいへんだごで。もとごしらえが一番たいへんだべな。それさ、使う場所にあうわらも要るしな。なえでも楽なものなて無いもんだな(奥村 1977, pp.88-89)。

先ず材料の吟味という大きな観点で見直してみる。

第1に、ワラをとるために稲の品種を「赤穂」、「月布」という品種にする。これらの品種から採れるワラの特徴は茎が長い、特にミゴ（稲の穂がつく部分の茎のこと）が長いこと、比較的茎が太い、太さや長さがそろそろ、そして最大の特徴は「しなみ（柔軟さ）」があることである。この品種を植えると、1反歩（約10アール）あたり、通常8俵ぐらい収穫できるのが7俵ほどとなり、1俵の減収となる。いいワラを得るためにはそういう不利益性は覚悟しなければならなかった。

第2に刈り取った後の稲を乾燥させる際に、通常の場合と違って、すぐにハセ掛けをしないで、畦に立てて乾燥する「カノコタテ」をして、その後ハセに掛けて乾燥する。ワラを青く仕上げるためである。したがって、通常より手間がかかる。

第3に材料とするワラを選別する。使う場所に合わせて一本一本選別する。これを「モトゴシラエ」といって、女子の仕事であった。

次に製作の際の留意点から見てみる。これは聞き書きの中には示されていないが、『東根村郷土史』には「沢山のわらの中から光沢のあるわらを選び、節（ふし）揃え表に節が出ぬように工夫した」（東根村郷土史刊行会 1972:320）と記してある。また『白鷹町史』下巻には「沢山のわらの中から、節間の長いわらだけを選び出し、節は表に出ないように工夫して編んだ」と記している（白鷹町史編纂委員会他 1977, p.1201）。

両者とも前半は材料の選択について述べており、後半が製作の工夫ということになる。その工夫とは「節が表に出ないように編む」ということは共通し、『東根村郷土史』ではさらに「節を揃える」ということが付け加えられている。どちらにしても手間のかかる作業ということになる。

まとめると、鈴木の改良の主眼は厳選された材料を使い、繊細な製作方法によって、「美しい」ワラグツを作るという方向性のものであったといえよう。

以上のようなことは、現在一般的に考えられる改良の方向性、省力化、生産性の向上とは逆行するものである。しかし、この「改良」は広く受け入れられたようである。「爾来この作り方が浅立一円に広まり」と白鷹町史には記されている（白鷹町史編纂委員会他 1977, p.1201）。

およそものを作る人々の製作意識の根底には、整ったものの、美しいものを作りたいという意識があると考えている。それはできる物の商品価値とは無関係にあるとも考える。浅立ワラグツの改良を行った鈴木の製作意識にもそれが働

いていたし、それを受け入れた他の人々にも共通して存在していたと考える。

地方で暮らしていると、さまざまな地域の共同作業への参加が求められ、道路脇の草刈りや共同施設の雪囲い作業などへ参加することとなる。そのような作業においても結果の美しさが話題となることも多い。それは作業効率とは無関係に作業者の評価となることも経験する。

渡部鮎美は「田の美しさ—富士河口湖町の「空中田植」を事例に—」で、手で放り投げて田植えを行う「空中田植」について、収量や労働時間の軽減という経済性の点では機械植より優っているのに、耕作者に広く受け入れられないのは、乱雑に見える「空中田植」の田が美しさの点で劣っているからであると指摘している。さらに、渡部は「耕作者は、田の美観を耕作者の性格を示すものとして捉え、このような田の評価を通して、耕作者の社会的評価をしてきた」とも述べている（渡部 2005, p.75）。

さらに、「農業技術史では、効率を技術革新の最大の要因としていたが、耕作者は効率だけでは、技術を受け入れてこなかった。技術の需要に際しては、耕作者の美意識が田の評価として言語化し、新技術導入に対する規制力として作用していた。さらに、この田の評価が耕作者の人物評価にもつながることから、技術の受容はムラビトとしての生き方をも問われるものであった」とも述べている（渡部 2005, p.76）。

鈴木の浅立のワラグツ改良が受け入れられたのにも、渡部が「空中田植」について述べたと同様な背景があると考えられる。浅立に生きる人々にとって、美しいワラグツを作ることが「ムラビト」として評価を高めることでもあったと考えられる。

## 2)浅立ワラグツの普及要因

商品として良いものが広く流通するとは限らない。単純化して考えると、広く流通させるためには、商品の需要先、つまり市場とそこへ商品を運ぶ流通手段が必要である。浅立ワラグツの場合、近隣では荒砥や長井といった町場の集落があった。まずはそこで商品としての流通が始まったと考えられる。

さらに、少し離れた場所としては米沢という大きな町があった。そこはワラグツの市場としては極めて魅力的なところだった。しかし、積雪のある冬期間に、米沢まで商品を運ぶ近代的な輸送手段は、明治時代には東根村そして浅立地区にはほとんどなかった。鉄道が長井まで開通したのは

大正3年(1914)、荒砥までは大正12年(1923)である。そこに至っても、東根村と川向かいの最上川西岸地区を通る鉄道は流通手段として利用するには不便なものであった。

このような状況を打開したのが、浅立原地区の梅津清助であった。先に述べたように、梅津は明治25年(1892)ごろにソリにワラグツを積み米沢市に運んで売り出し、米沢へ大量売り出しの先鞭を付けた。

この梅津の行動の詳細を記した史料は残されていない。「ソリ」といっても馬にひかせた馬そりを用いたのであろうと推測されるが、それもわからない。しかし、梅津の行動は成功できれば賞賛されるが、失敗すれば冷ややかに見られ、場合によっては大きな負債を負うかもしれない大きな賭であったと推測される。結果的に成功したので、以降、太田良助、鈴木甚太郎など後に続くものも生まれた。商売が拡大するためには、このような「冒険者」も必要であるといえよう。

さらに、世間に対して知名度を上げる必要もある。浅立ワラグツの歴史の中には、地元農産物品評会に出品し優秀賞を取ったことが記されている。それだけでなく、大坂の博覧会にも出品したことも記されている。そのような形で、広く浅立のワラグツの素晴らしさを知らせようとした人がいたことも記されている。

そのようなことで浅立のワラグツは「アサダチ」という名で知られるほど名産品化(ブランド化)されていった<sup>8</sup>。さらには「民芸品」として認められるようになったのも昭和15年の民芸品展覧会への出品がきっかけであると考えられる。

現在のように商業的な宣伝活動が多様で活発な時代のあり方とは比較できないが、このような品評会や博覧会、展覧会への出品はかなりの宣伝活動になったのではないかと考える。出品に踏み切った人たちがいたことにも注目しておきたい。

## (2) 民芸品化について

### 1) 要因としての雪国協会の働き

先述したように浅立のワラグツが「民芸品化」されるきっかけを作ったのは、小形安雄が置賜農学校で開催された「民芸品展覧会」に出品したことによる。

この展覧会開催の中心になったのは財団法人雪国協会である。この協会は雪調(積雪地方農村経済調査所)内に開設された協会で、当時所長であった山口弘道が会長を務めていた。雪調及び雪国協会では、雪国のために蒙る不利益のために近代科学文化に後れをとり、経済的に恵まれない東北農村をなんとか豊かにさせたいと考えてきた。

そのためには農業の副業として民芸品制作が大きな可能性があると考えた。そこで、昭和12年3月、山口が柳を訪問して協力を要請し、そのことをきっかけとして、昭和13年(1938)には雪調で山形県最上郡下の民芸展を開催した。また翌昭和14年(1939)には、庄内の藤島農学校で庄内展を開催した。この二つの民芸品展覧会の成功を基盤として、昭和15年の東北各地での民芸品展覧会へ拡大するのである(森本 1940, pp.60-63, 山口 1940, pp.2-4)。したがって、この展覧会が開催されるには、雪調所長山口が、雪国協会会長として行った、柳への働きかけが重要であった。

また、すでに柳は昭和2年(1927)に翌3年の御大札記念博覧会で「民芸館」での展示頒布のための民芸品収集を行ったことを皮切りに、何度か東北地方を旅行している。さらに昭和12年(1937)3月発行の『工藝』第74号では「箕(みの)」を特集し、そのなかで津軽、岩手、鹿角、仙北地方の箕の美しさを述べるなど、東北の日用品への理解も進んでいた。したがって、柳には山口の要請を受ける基盤は整っていたと考えられる。

さらには、雪調が公の機関であることから、そこに設置されている雪国協会が各県の関係機関へ働きかけ、協力を得ることがそれほど難しくなかったと推測される。

### 2) 浅立のワラグツの評価をめぐって

先に「民芸品」とは柳の審美眼によって選択された品物であると定義した。また、本稿の最初で柳の『手仕事の日本』で浅立のワラグツを評した「藁沓で最も出来の美しいのは西置賜郡東根村浅立の産で、仕事が極めて入念であります」ということばを紹介したが、それはそのまま「民芸品」としての浅立のワラグツの評価としてよいだろう。ここでは外見の美しさが重視されている。そのことに注目したい。

また先に引用した森本信也の『月刊民藝』第2巻第8号「東北民藝解説」での評価がある。重要な指摘があるので、次に必要部分を再掲する。

置賜東根村の型は、前者(山添村のもの 筆者註)に較べて少々技が繊細であり、體裁は優れてゐるが耐久力に於て稍損色があるかの如く見受けられる。藁材料の品質を特に吟味するために青く光澤があり、見るからに農民藝術的な藁靴である。編み方は庄内と違い正面に二條の太い編み線を表はし、瀟洒な感じをあたへるが、甲の側面を下から編んだ方がより実用性を與へ得ると謂へよう。三越の展覧會でもこ

---

の地のもので赤い布で縁を取った子供用の藁靴が素晴らしい人気を呼んだ。子供用のものは深さ三寸位で地元の値は一圓見當である。(再掲)

ここでは外見については、「繊細」、「青く光澤があり」、「農民藝術的な藁沓」、「瀟洒」と表記され、柳の評価とほぼ同じと考えてよいだろう。

先に述べたように、鈴木改良の結果生まれた浅立のワラグツは、「美しさ」を主眼としたものであったので、このような評価を受けることは本望だったといえよう。さらに先に紹介した、大阪博覧会で梅津儀蔵が出品したワラグツが、ある資産家に買われて床の間に飾られ、銭入れに使われていたという逸話が語り継がれていることはその象徴ともいえよう。

ここで、森本の評価を検討してみたい。確かに森本は美しさを肯定しながらも、「體裁は優れてゐるが耐久力に於て稍損色があるかの如く見受けられる」と指摘し「甲の側面を下から編んだ方がより実用性を與へ得ると謂へよう」という改善の観点も示している。

森本のこのような指摘は、ワラグツを単に「物」として見ず、実際に「日用品」として実用する雪国の人間の観点が現れたものと考えられる。

美しさの追求が実用品としての堅牢さの追究を上回ったともいえるが、それは実用品として失格であったということではない。日露戦争の際に多くのワラグツの供出を求められたことや豪雪地帯である米沢に大量に売り出したという歴史は、浅立のワラグツが実用品として十分な耐久性を備えていたことを裏付けるものである。

柳と森本の微妙な評価の相違は、それを実際に使用するものとそうでないものちがいであろう。それは森本の「東北民藝解説」に「三越の展覧會でもこの地のもので赤い布で縁を取った子供用の藁靴が素晴らしい人気を呼んだ」と記されているが、当然これは実用品としてではなく、注目した人たちは実用するのではなく、美しさを鑑賞するためのものとして注目したのである。

今日、手仕事で生産される工芸品の継続性が問題となっている。「民芸品」の場合、この「実用品」でありながら同時に、「鑑賞する品物」であることが「生業」の問題を背負うだけに深刻になっているのではないかと考える。

浅立のワラグツの場合、日用品、実用品としての使命はゴム長靴の普及によって終えている。実用品として他の用途への転換については、例えば雪調及び雪国協会では農

---

民手工芸の行く末を考えて、シャルロット・ペリアンなどの指導を受け、昭和16年3月に「手工芸講習會」を開催し、それまでの農手工芸制作技術を用いて、一般国民生活の用途似合った品物を作ることを奨励している。浅立のワラグツ製作技術は「藁スリッパ」の形として最も優れた物とされた(森本 1941, p.25)。

しかし、それは浅立では受け入れられなかったようである。このスリッパ作りについては聞くこともなければ史料も見当たらない。時期的に考えると、次の年の昭和17年には、先述したように鈴木甚太郎が朝鮮までワラグツ作りの指導に出かけている。戦争が激しくなり、ゴム長靴が不足したことなども影響して、生産者は、生業としてのワラグツ作りにそれほど不安を感じなかったのではないかと考えられる。そこで積極的にスリッパ作りへの転換の取り組みはなされなかったのではないかと推測される。

---

## 4.まとめ

### (1) 生業としての発展と終焉

#### 1) 発展させた人材

ものを生産するということが、個人の仕事として行われる場合、生産者はそれぞれに自分のやり方をする。それは、手仕事を研究する中で、多くの人に話を聞いた体験からいえることだ。一般的に生産技術は、それぞれの生産者が工夫することで常に改良されていたと考える。浅立のワラグツの場合、鈴木大吉が「えりわら」によるワラグツ製造という改良を行う以前にも、様々な改良は行われていたのではないかと考える。

そのような多くの改良のうち、大きな転換点を作ったものが生産地で語り継がれ、「歴史的改良」として定着する。したがって、鈴木大吉の業績は「浅立ワラグツの改良の歴史」の一つの象徴ともいべきものと考えられる。

一方、生業として継続するには、その生産物が生活を支えることができるために、確かな商品流通が必要であることはいうまでもない。浅立ワラグツの場合、梅津清助の行動は画期的なものであった。このような「商才」を持った人物がいたことは幸運だったといえる。さらに、品評会、展覧会、博覧会などの展示に応募した人たちがいたこともあわせて、浅立のワラグツを「アサダチ」というブランドまで押し上げた、また「民芸品」として都会へまで進出する基になったと考え

られる。

まとめると、きわめて当たり前のことになるが、浅立のワラグツの生業継続を支えた多くの人材がいたということになる。

## 2) 実用性の喪失

生業としてのワラグツ生産が終焉を迎えたのは、ゴム長靴が広く普及し、耐久性や耐湿性などにおいて、ワラグツはゴム長靴に及ばなくなったことが最も大きな要因であろう。

もともと、ワラグツは雪国の冬期間の生活用品として作られたものである。雪の上を歩くときに滑らないで歩け、しかも足を保温するのに適切なものとして考えられた履物である。それがワラグツの第一義の存在理由である。

一方、ゴム長靴は雨天時の履物として開発されたことから、耐水性が極めて高い。保温性についても、ゴム長靴の内張がそれほど発達していない時代にはワラを中に敷くということで補えば一定程度確保できた。したがって、雪国において、ゴム長靴がある程度安価に手に入れられるようになると、冬の履物として広く普及してゆくのは当然だった。こうして、ワラグツの生活用品としての役割を終えてゆく。

ことばを換えていうと、ワラグツは生活用品としての実用性を失ったということが、生産が行われなくなった決定的要因といえる。「実用性を失った生活用品は消滅する」、そしてそれを生産する生業も同様の運命をたどるということは一般的にもいえるだろう。「民芸品」という特殊なブランドのものであっても、その生産が生業として行われるのであれば、その運命をのがれることができないということを「浅立のワラグツ」は示していると考ええる。

## (2) おわりに

手仕事による生業の調査、研究をしている過程では、面白い話を聞くことは希である。ほとんどが経済性の悪さや後継者がいないことなどによる存続の難しさの話ということも

少なくない。とりわけ、生活に関わるものを作っている場合、大きく生活様式が変化したことからおこる将来の展望の悪さに記因するものである。

さて、本稿で取り上げた「浅立のワラグツ」の歴史は、最盛期だけを見ると100年に満たない歴史である。そこに製品の改良や販路の拡大、ブランド化する過程など典型的な「生業の盛衰」が現れていると考える。

「美しく」作られたワラグツが、ゴム長靴に席卷される形で生業の終焉を迎えた決定的な要因は「実用性の喪失」であった。生活用品を生産する上で最も考慮されなければならないのは「実用性」ということだろうと考える。

考えてみれば、柳が「民芸品」として認めたものの中で、私たちが多く目にするものは陶器が多い。たとえば、会津の本郷焼、山形の平清水焼、飛ばし匏の小鹿田焼(おんだやき)など。これらは本来の器としての実用性を失っていない。そしてその上で「美しさ」を備えている。そのことが生業として継続できている要因なのではないか。

「浅立のワラグツ」の場合、室内履きやスリッパなどの生産が提案されたことがあった。昭和16年の雪調及び雪国協会の行ったものである。浅立でそれが受け入れられたらどうだったかと夢想する。往時のような盛況さは期待すべきではないが、細々と機械生産、大量生産の室内履きやスリッパの隙間を埋める形で存在できたかもしれないと考える。

機械文明が大きく高度に発達した現在、私たちの思考はそれから離れることは難しくなっている。一方で手仕事の持っている論理は、それとは違う論理である。もう一度それをしっかりと見直して、そこから新たな思考を展開する必要があるのではないか。「浅立のワラグツ」の短い歴史はそれを考える機会を与えてくれたと考える。

1 小形仁兵衛の調査報告書は筆者未見である。

2 奥村幸雄のノートで、聞き書きの期日は昭和49年(1974)2月1日であることが明らかになった。

3 生業の詳細な分析については、拙稿『念仏供養石建立をめぐる生活誌—地域史研究のために民俗学の立場からできること—』(2020 東北芸術工科大学紀要第27号)を参照のこと。

4 (白鷹町史編纂委員会他編1977, pp.1201-1202), (奥村1977, pp.88-89)

5 『雑器の美』は昭和2年(1927)に刊行された。前年に発表した「下手もの美」を改稿し、収録した。(水尾 2004, p.191)

6 二つの論考とは「雑器の美」と「工藝の美」を指している(松井2014, p.20)

7 なお、昭和15年の東北民藝展に柳と同行した式場隆三郎は、翌16年に浅立を訪問し、「藁工品組合」の組合長の世話により、ワラグツ製作の工程を見学している(式場 1947, pp.149-150)。

8 新潟県長岡市にあった旧積雪科学館が所蔵した民具が長岡市科学博物館に収蔵されている。その目録の受け入れ番号200、234には「アサダテ」という名称が振られている。いずれも収集地が山形県米沢市であったので、問い合わせたところワラグツの形状をしているとの回答を頂いた。カタカナの「チ」は「テ」と形が似ており、手書き



---

であると読み誤りがあるとも考えられる。そうであるならば、米沢市で「アサダチ」がワラゲツの名称として通用していた傍証となるだろう。実物を確認したいと考えているが、新型コロナ感染症流行のため現在まで行くことができない。今後の課題としたい。

#### 参考・引用文献

- 朝日新聞福島支局編。(1980).『ふくしまふるさとの手仕事』. 歴史春秋社.
- 祝宮静編。(1965).『日本の生活文化財』. 第一法規出版.
- 祝宮静・関敬吾・宮本馨太郎編。(1969).『日本民俗資料事典』. 第一法規出版.
- 奥村幸雄。(1977).『手わざの栗—手仕事をたずねて—』. 私家版.
- 三条市市民部生涯学習課編。(2017).『吉ヶ平の民具—収集・調査・整理の記録—』. 三条市.
- 志賀直邦。(2016).『民藝の歴史』. 筑摩書房.
- 上越市史専門委員会民俗部会編。(1999).『桑取谷民俗誌』. 新潟県上越市.
- 式場隆三郎。(1947).『諸國の民藝』. 講談社.
- 白鷹町史編纂委員会・白鷹町史編集委員会。(1977).『白鷹町史—下巻—』. 白鷹町.
- 白鷹町史編さん委員会・白鷹町史編集委員会。(2014).『白鷹町史—現代編—』. 白鷹町.
- 只見町史編さん委員会編。(1992).『図説—会津只見の民具—』. 福島県只見町.
- 柳宗悦。(1985).『手仕事の日本』. 岩波書店.

- 出川直樹。(1988).『民芸—理論の崩壊と様式の誕生—』. 新潮社.
- 長岡市立科学博物館編。(1970).『雪国の民具—旧積雪科学館収蔵民具目録—』. 積雪研究会.
- 農林水産技術会議事務局編。(1988).『写真で見る農具民具』. 農林統計協会.
- 東根村郷土史刊行会 編。(1972).『東根村郷土史』. 東根村郷土史刊行会.
- 松井健。(2005).『柳宗悦と民藝の現在』. 吉川弘文館.
- 松井健。(2014).『民藝の擁護—基点としての〈柳宗悦〉—』. 里文出版.
- 水尾比呂志。(2004).『評伝柳宗悦』. 筑摩書房.
- 森本信也。(1940).「東北の民藝運動—東北民藝品展に関して—」. 『月刊民藝』第2巻第4号, 60–63.
- 森本信也。(1940).「東北民藝解説」. 『月刊民藝』第2巻第8号, 6–18.
- 森本信也。(1941).「農民手工業の一進路」. 『月刊民藝』第3巻第5号, 23–28.
- 柳宗悦。(1984).『民藝四十年』. 岩波書店.
- 柳宗悦。(2006).『民藝とは何か』. 講談社.
- 柳田国男、柳宗悦。(1940).「民藝と民俗學の問題」. 『月刊民藝』第2巻第4号, 24–33.
- 山口弘道。(1940).「東北民藝展の趣旨」. 『月刊民藝』第2巻第8号, 2–4.
- 渡部鮎美。(2005).「田の美しさ—富士河口湖町の「空中田植」を事例に—」. 『日本民俗学』第242号, 64–79.